

## 1. 研究計画

昨年にひきつづき母子感染による心身障害児の発生を予防することを目的とし、その予防対策並びに保健指導の指針作りを最終目的とした

- (1)母体感染症の実態と母子感染による先天異常発生の実態を把握する。藤井班員、末原班員  
矢吹班員、川名班員が担当する。
- (2)新生児・乳児からみて問題となる母子感染の本邦における実態を調査すると共に、文献検索を行なう。森島班員
- (3)昨年度の研究で問題提起された以下の点について専門家によるワーキンググループを結成し、討論する。川名班員、矢吹班員、森島班員
  - ①風疹IgM抗体検査法
  - ②トキソプラズマの母子感染の実態
  - ③サイトメガロウイルスの母子感染の実態
- (4)リンゴ病の原因となるパルボウイルスB19感染の診断法の確立。菅村班員、松永班員
- (5)母体感染症に関する保健指導の指針作りの準備

## 2. 研究経過：2回の班会議を行なった

第一回班会議：平成4年8月7日 於 東大分院

厚生省母子衛生課より正林氏と川名分担研究者、研究協力者並びに同伴者

( )として、菅村和夫、松永泰子、森島恒雄（山崎俊夫）、藤井仁（渡辺徹）、矢吹朗彦（干場勉）、末原則幸の諸氏、東大分院より加藤賢朗、佐藤洋一、後藤哲也の諸氏が参加して行なわれた。

各班員の研究報告とガイドライン作りのための討論が、行なわれた。

第二回班会議：平成5年1月29日 於 東大分院

川名分担研究者、研究協力者並びに同伴者( )として、菅村和夫、松永泰子、森島恒雄（山崎俊夫）、藤井仁（渡辺徹、長谷部俊朗、升田春夫）、矢吹朗彦（干場勉）、末原則幸の諸氏、東大分院より加藤賢朗氏が参加して行なわれた。

母子感染に関する各班員の研究成果発表とガイドライン作りの概要と問題点について意見交換が行なわれた。

## 3. 研究結果

### (1)妊婦における感染症合併

昨年に引き続き東京、大阪、金沢で1992年度の妊婦3713例につき調べた。

梅毒0.45%、風疹0.08%、性器ヘルペス0.35%、リンゴ病0.11%、水痘0.13%、HTLV-1 0.28%、GBS 7.1%、HCV 0.34%トキソプラズマ4.7%等であった。生まれた児では、先天梅毒児2例が認められた他は、流産はあったが先天異常児は生まれていない。

#### (2) 小児に対する母子感染の影響

TORCH Complexの中でトキソプラズマ、サイトメガロウイルス、単純ヘルペスウイルスの母子感染を小児科の立場から検討し、以下の結果を得た。

- ①先天性トキソプラズマ症は報告例からは年間5～7例の発症頻度となるが、出生後かなりたって 眼科的に網脈絡膜炎として発症する例も多く、実際はもう少し多いと予測される。
- ②サイトメガロウイルスの胎内診断法としてpolymerase chain reaction法は有用であった。
- ③新生児ヘルペスの発症数は減少していない。

こうした母子感染の実態調査を全国規模で多方面にわたりて実施する必要がある。

#### (3) 妊婦における風疹抗体検査

平成2年に提案された指針では、風疹の感染時期の判断にIgM抗体を取り入れること、方法としては捕捉法が適していることが提唱された。これを日常臨床に取り入れるためにはIgM抗体測定法のどれを採用するか、また、得られた結果をどう判断するかの指針が必要である。そこで本邦で用いられている四つキットについて検討した結果、前回推奨された捕捉法は、風疹感染後のIgM検出期間が長期にわたるため妊婦における風疹の感染時期を判断するには、むしろ適していないことが判明した。

結論としては、各キット毎の特性を良く理解した上で判断することが必要であり。

日常臨床で特に産婦人科医が混乱しないための指針を作成する必要のあることが提案された。

#### (4) トキソプラズマの母子感染の実態 ..... 1985年の松本らの調査研究は、トキソプラズマの先天感染の全貌をとらえているとは言い難く、生後長期にわたる追跡調査をとくに眼科領域をも含めて行なう必要があることが確認された。また、診断、特に病原診断に改良が加えられることが切望される。

#### (5) サイトメガロウイルスの母子感染の実態 ..... 本邦でこのウイルスの先天感染は0.4%、約500例／年あり、その10%（500例）は症候性といわれている。特に難聴は、重症のものが多く、今後の検討を要する。最近サイトメガロウイルスに対して免疫の

ない妊婦が増加していて、妊娠中の初感染の危険のある者が増加していることが判った。

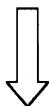
今後、欧米のように問題に成る可能性が示された。

#### (6)ヒトパルボウイルスB19感染診断法の開発と評価

菅村班員は、VP-1融合蛋白を用いてIgM、IgG抗体検出法を確立し健常人においてIgM抗体を4%に、IgG抗体を27%に検出した。松永班員は、VP-1抗原とVP-2抗原に対する免疫応答がそれぞれ異なることから、粒子抗原を用いる系がより優るとの考えからバキュロウイルス発現系により得た粒子抗原をもちいるELISAの系を確立した。これによると、血漿由来のウイルス抗原を用いた時とよく一致することが確かめられ、診断法としてより適当であることを確認した。

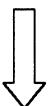
#### (7)母体感染症に関する保健指導の指針作り

本指針作りのためには、母体感染とその児への影響の実態が未だ十分に解明されていない点がありにも多いことが判明した。例えば、サイトメガロウイルス、トキソプラズマ、クラミジア、GBS、水痘、C型肝炎ウイルス、HTLV-1、など、比較的頻度の高い重要なものがこれに含まれる。来年度に向けて必要に応じて詳細な検討グループを結成して、結論を出して出して行きたい。



## 検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用

論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります



### 1 研究計画

昨年にひきつづき母子感染による心身障害児の発生を予防することを目的とし、その予防対策並びに保健指導の指針作りを最終目的とした

- (1)母体感染症の実態と母子感染による先天異常発生の実態を把握する。藤井班員、末原班員矢吹班員、川名班員が担当する。
- (2)新生児・乳児からみて問題となる母子感染の本邦における実態を調査すると共に、文献検索を行なう。森島班員
- (3)昨年度の研究で問題提起された以下の点について専門家によるワーキンググループを結成し、討論する。川名班員、矢吹班員、森島班員

風疹 IgM 抗体検査法

トキソプラズマの母子感染の実態

サイトメガロウイルスの母子感染の実態

- (4)リンゴ病の原因となるパルボウイルス B19 感染の診断法の確立。菅村班員、松永班員
- (5)母体感染症に関する保健指導の指針作りの準備